

成人の日に思う

年末年始から成人式にかけて、中学校で指導したかつての生徒たちと話をする機会があった。

20歳前後の方々である。

20歳になると、中学生の頃と比べ身体も考え方も立派で、元教師の立場ではなく、父親の立場から見ると、皆すてきな男性女性たちである。

さて、20歳は義務教育修了後5年経過した頃である。

教育を含めた社会全般に関し、「十年一昔」から5年・3年が一昔と考えられるようになって久しい。

5年前に中学校で指導したことや彼ら彼女たちが学んだ経験が、今日役に立っているのか考えてみることは意味あることであろう。

次期学習指導要領に関わる「論点整理」では、「2030年の社会と、そして更にその先の豊かな未来を築くため」を視野において示されるようだ。

教育に関わる者は、社会に対する視野が狭いと言われることがある。確かにそうかもしれない。

自分に関していうと、5年、10年生活が大きく変わった意識はない。せいぜい携帯電話がスマホになり、有線がWi-Fiになり、自動車は今でもガソリンだけで動いている。プレゼンテーションも静止画だけでなく動画もあった。パソコンは薄っぺらくなったが・・・。

20歳になった若者たちもほぼ同じであろう。

しかし、私が知らないこれらの背後では相当大きな技術革新等があるのだろう。関わっている方々の5年は相当大きな変化があったと推察される。

一方、最近の話題に、就職をめざす大学4年生や新入社員が、キーボードを操作できず、文章を書く（構成する）ことができないと問題になっている。大学や社会が、記録はカメラ、記述はタッチパネルでつぶやく程度だけの生活を容認してきた、そのことがこのような状況をつくってしまったのではないだろうか。

義務教育ではこのような指導は行っていない（と思っている）。しかし、義務教育後、義務教育以外でも人間は学び成長しているのである。

こう考えると、成長の基盤と成長の一部をになう義務教育はどうあるべきかを考える必要がある。

ひとつ言えることは、どんな時代になっても必要とされる、生きていくための権利行使のための「読書算」（基礎）と学問体系の一部としての教科の内容（基本）を確実に身につけさせてから社会に送り出すことである。

次期学習指導要領では新たに「どのように学ぶか」が加わる予定である。しかし、「資質・能力」が明記されていることからしても基礎・基本の習得は重要なことである。

絶対に「勉強はできるが何も知らない若者」と言わせないようにしたい。

我々、大人もこのことについて、主体的に深く考えないといけないと感じた成人の日であった。